

III. 正規直交枠

1 次微分形式 多様体 S の点 P における接空間 $T_P S$ の双対空間を $T_P^* S$ と書く．すなわち

$$T_P^* S := \{\omega_P: T_P S \rightarrow \mathbb{R}, \omega_P \text{ は線形写像}\}.$$

とくに S が n 次元多様体ならば $T_P S, T_P^* S$ はともに n 次元の線形空間となっている．実際，

補題 3.1. $T_P S$ の任意の基底 $\{e_1, \dots, e_n\}$ に対して

$$\omega^j(e_k) = \begin{cases} 1 & (k = j) \\ 0 & (k \neq j) \end{cases}, \quad (i, j = 1, \dots, n)$$

を満たす $T_P^* S$ の要素の組 $\{\omega^1, \dots, \omega^n\}$ がただひと組存在する．さらに $\{\omega^1, \dots, \omega^n\}$ は $T_P^* S$ の基底になる．

補題 3.1 の $\{\omega^j\}$ を $T_P S$ の基底 $\{e_k\}$ の双対基底という．とくに, P を含む S の局所座標系 (u^1, \dots, u^n) に対して

$$\left(\frac{\partial}{\partial u^1}, \dots, \frac{\partial}{\partial u^n} \right) \text{ の双対基底を } (du^1, \dots, du^n)$$

と書く．

各点 P ごとに $T_P^* S$ の要素 ω_P を対応させる規則 ω を 1 次微分形式という．微分形式 ω とベクトル場 X に対して $\omega(X)$ は S 上の関数を与えるが, 「 X が滑らかならば $\omega(X)$ は滑らか」であるときに ω は滑らかな 1 次微分形式であるという¹⁾．局所座標系 (u^1, \dots, u^n) を用いると, 滑らかな 1 次微分形式 ω は, u^1, \dots, u^n の滑らかな関数 a_1, \dots, a_n を用いて

$$(3.1) \quad \omega = a_1 du^1 + \dots + a_n du^n$$

^{*)}2017 年 07 月 04 日 (2017 年 7 月 11 日訂正)

¹⁾以下, ベクトル場, 微分形式はとくに断らないかぎり滑らかなものとする．

の形に書き表すことができる．一般に S 上の滑らかな関数 f に対して

$$df(X) := Xf \quad (f \text{ の } X \text{ 方向の方向微分})$$

とおくと df は S 上の 1 次微分形式を与える．これを f の外微分または全微分という．局所座標系 (u^j) を用いれば,

$$df = \sum_{j=1}^n \frac{\partial f}{\partial u^j} du^j$$

と表すことができる．

2 次微分形式 以下, 簡単のため S の次元 $n = 2$ とする．積空間 $T_P S \times T_P S$ 上の反対称双線形形式全体のなすベクトル空間を $\wedge^2 T_P^* S$ と書く．各点 P に対して $\alpha_P \in \wedge^2 T_P^* S$ を対応させる写像 α を 2 次微分形式という．とくに α が滑らかであるとは, 任意の滑らかなベクトル場 X, Y に対して $\alpha(X, Y)$ が滑らかな関数となることである．2 つの 1 次微分形式 ω, μ と滑らかなベクトル場 X, Y に対して

$$\omega \wedge \mu(X, Y) := \omega(X)\mu(Y) - \omega(Y)\mu(X)$$

と定めると $\omega \wedge \mu$ は 2 次微分形式を与える．とくに S の次元が 2 であることに注意すると, S 上の任意の 2 次微分形式 α は, 局所座標系 (u^1, u^2) のもとで, 滑らかな関数 $\hat{\alpha}(u^1, u^2)$ を用いて

$$\alpha = \hat{\alpha} du^1 \wedge du^2$$

と表される．

滑らかな 1 次微分形式 ω とベクトル場 X, Y に対して

$$(3.2) \quad d\omega(X, Y) := X(\omega(Y)) - Y(\omega(X)) - \omega([X, Y])$$

と定めると $d\omega$ は 2 次微分形式を与える．この $d\omega$ を ω の外微分という．とくに (多様体 S の次元は 2 であることに注意すれば)

$$\omega = \omega_1 du^1 + \omega_2 du^2 \quad \text{に対して} \quad d\omega = \left(\frac{\partial \omega_2}{\partial u^1} - \frac{\partial \omega_1}{\partial u^2} \right) du^1 \wedge du^2$$

を満たす．とくに，滑らかな関数 f に対して

$$(3.3) \quad d(df) = 0$$

が成り立つ．

正規直交枠 以下 (S, ds^2) を 2次元リーマン多様体とする．開集合 $U \subset S$ 上の 2つのベクトル場の組 $\{e_1, e_2\}$ が U の各点 P で $T_P S$ の (内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle = ds^2$ に関する) 正規直交基底を与えているとき, $\{e_1, e_2\}$ を正規直交枠²⁾ という．

補題 3.2. 2次元リーマン多様体の任意の座標近傍 $(U; u^1, u^2)$ 上に正規直交枠が存在する．

証明. 基底 $\{\partial/\partial u^1, \partial/\partial u^2\}$ にグラム・シュミットの直交化を施せばよい (問題 III-1) . □

補題 3.3. 2次元リーマン多様体 (S, ds^2) 上の点 P の近傍で定義された 2つの正規直交枠 $\{e_1, e_2\}, \{\tilde{e}_1, \tilde{e}_2\}$ に対して P の近傍で定義された滑らかな関数 θ が存在して，

$$(3.4) \quad (\tilde{e}_1, \tilde{e}_2) = (e_1, e_2) \begin{pmatrix} \cos \theta & \mp \sin \theta \\ \sin \theta & \pm \cos \theta \end{pmatrix}$$

となるものが存在する．

証明. 正規直交基底の間の変換行列は直交行列である． □

リーマン接続と接続形式 2次元リーマン多様体 (S, ds^2) の開集合 U 上に正規直交枠 $\{e_1, e_2\}$ が与えられているとする．計量 ds^2 から定まるリーマン接続 ∇ に対して次が成り立つ：

補題 3.4. 任意のベクトル場 X に対して $\langle \nabla_X e_j, e_j \rangle = 0$ が成り立つ．また，

$$\mu(X) := \langle \nabla_X e_2, e_1 \rangle$$

²⁾正規直交枠 : an orthonormal frame

とおくと μ は U 上の 1 次微分形式で，

$$(3.5) \quad \nabla_X e_1 = -\mu(X)e_2, \quad \nabla_X e_2 = \mu(X)e_1$$

が成り立つ．

証明. 正規直交基底であることから, $\langle e_i, e_j \rangle = \delta_{ij}$. したがって, (2.9) から

$$(3.6) \quad 0 = X \langle e_i, e_j \rangle = \langle \nabla_X e_i, e_j \rangle + \langle e_i, \nabla_X e_j \rangle$$

が成り立つ．とくに $i = j$ として, 内積の対称性に注意すれば $\langle \nabla_X e_j, e_j \rangle = 0$ が得られる．さらに事実 2.5 から

$$\begin{aligned} \mu \left(X^1 \frac{\partial}{\partial u^1} + X^2 \frac{\partial}{\partial u^2} \right) &= X^1 \mu \left(\frac{\partial}{\partial u^1} \right) + X^2 \mu \left(\frac{\partial}{\partial u^2} \right) \\ &= \left(\mu \left(\frac{\partial}{\partial u^1} \right) du^1 + \mu \left(\frac{\partial}{\partial u^2} \right) du^2 \right) (X) \end{aligned}$$

となるので, μ は 1 次微分形式．さらに, $\nabla_X e_2$ は e_1, e_2 の線形結合になるが, 最初の結果から e_2 方向の成分は 0 . したがって

$$\nabla_X e_2 = \langle \nabla_X e_2, e_1 \rangle e_1 = \mu(X)e_1.$$

さらに (3.6) に $i = 1, j = 2$ を代入すると

$$\nabla_X e_1 = \langle \nabla_X e_1, e_2 \rangle e_2 = -\langle \nabla_X e_2, e_1 \rangle e_2 = -\mu(X)e_2$$

となって結論が得られた． □

式 (3.5) を満たす 1 次微分形式 μ をリーマン接続 ∇ の正規直交枠 $\{e_1, e_2\}$ に関する接続形式³⁾ という．

補題 3.5. 2次元リーマン多様体 (S, ds^2) の正規直交枠 $\{e_1, e_2\}$ に関する接続形式を μ とする枠 $\{e_1, e_2\}$ の双対基底からなる 1 次微分形式の組 $\{\omega^1, \omega^2\}$ は

$$d\omega^1 = \omega^2 \wedge \mu, \quad d\omega^2 = -\omega^1 \wedge \mu$$

を満たす．

³⁾接続形式 : the connection form

証明. 共変微分の性質 (2.9) から

$$[e_1, e_2] = \nabla_{e_1} e_2 - \nabla_{e_2} e_1 = \mu(e_1)e_1 + \mu(e_2)e_2.$$

したがって, (3.2) と $\omega^i(e_j) = \delta_j^i$ から

$$\begin{aligned} d\omega^1(e_1, e_2) &= e_1\omega^1(e_2) - e_2\omega^1(e_1) - \omega^1([e_1, e_2]) \\ &= -\mu(e_1), \end{aligned}$$

$$(\omega^2 \wedge \mu)(e_1, e_2) = \omega^2(e_1)\mu(e_2) - \omega^2(e_2)\mu(e_1) = -\mu(e_1)$$

$$\begin{aligned} d\omega^2(e_1, e_2) &= e_1\omega^2(e_2) - e_2\omega^2(e_1) - \omega^2([e_1, e_2]) \\ &= -\mu(e_2), \end{aligned}$$

$$(\omega^1 \wedge \mu)(e_1, e_2) = \omega^1(e_1)\mu(e_2) - \omega^1(e_2)\mu(e_1) = \mu(e_2).$$

S は 2 次元なので, 任意のベクトル場 X, Y に対して

$$d\omega^1(X, Y) = (\omega^2 \wedge \mu)(X, Y), \quad d\omega^2(X, Y) = -(\omega^1 \wedge \mu)(X, Y)$$

が成り立つ. □

補題 3.6. 2 つの正規直交枠 $\{e_1, e_2\}$ と $\{\tilde{e}_1, \tilde{e}_2\}$ が (3.4) で関係付けられているとき, $\{e_1, e_2\}$ に関する接続形式 μ と $\{\tilde{e}_1, \tilde{e}_2\}$ に関する接続形式 $\tilde{\mu}$ は $\tilde{\mu} = \pm(\mu - d\theta)$ をみたす.

証明. 事実 2.5 と補題 3.4 からわかる (問題 III-2). □

系 3.7. 2 次元リーマン多様体 (S, ds^2) の正規直交枠 $\{e_1, e_2\}$ に関する接続形式 μ に対して $d\mu(e_1, e_2)$ で与えられる関数は, 正規直交枠のとり方によらない.

証明. 式 (3.4) のような正規直交枠 $\{\tilde{e}_1, \tilde{e}_2\}$ に関する接続形式を $\tilde{\mu}$ とすると, 補題 3.6 と式 (3.3) から, 2 次微分形式 $d\tilde{\mu} = \pm d\mu$. とくに

$$\begin{aligned} d\tilde{\mu}(\tilde{e}_1, \tilde{e}_2) &= \pm d\tilde{\mu}(\cos\theta e_1 + \sin\theta e_2, -\sin\theta e_1 + \cos\theta e_2) \\ &= \pm d\tilde{\mu}(e_1, e_2) = d\mu(e_1, e_2) \end{aligned}$$

となり, 結論が得られた. □

定義 3.8. 2 次元リーマン多様体の正規直交枠 $\{e_1, e_2\}$ に関する接続形式を μ とするとき,

$$K := d\mu(e_1, e_2)$$

をリーマン多様体の (内的な) ガウス曲率とよぶ⁴⁾.

第 II 回でリーマン曲率テンソル R を定義したが, ガウス曲率は R を用いて次のように表すことができる (問題 III-3):

命題 3.9. 式 (2.11) で定義された曲率テンソル R を用いると,

$$K = \langle R(e_1, e_2)e_2, e_1 \rangle$$

が成り立つ. ただし $\{e_1, e_2\}$ は正規直交枠である.

さらに (2 次元リーマン多様体については) K はリーマン曲率テンソルの全情報を握っている. すなわち

事実 3.10. リーマン多様体 (S, ds^2) , (S, dt^2) のガウス曲率が一致するならば, 曲率テンソルは一致する. とくに, 曲率テンソルの全ての成分が 0 となるための必要十分条件は, ガウス曲率が恒等的に 0 となることである.

この事実 3.10 の証明はここでは与えないが, 曲率テンソルの対称性

$$\begin{aligned} \langle R(X, Y)Z, W \rangle &= -\langle R(Y, X)Z, W \rangle = \langle R(Z, W)X, Y \rangle, \\ R(X, Y)Z + R(Y, Z)X + R(Z, X)Y &= 0 \end{aligned}$$

と, 次元が 2 であることから示すことができる.

応用: 平坦リーマン多様体の特徴付け 前回の定理 2.9 を, ガウス曲率を用いて述べ直し, それに証明を与えよう.

定義 3.11. 2 次元リーマン多様体 (S, ds^2) が平坦⁵⁾ であるとは, ガウス曲率 K が恒等的に 0 となることである.

⁴⁾ \mathbb{R}^3 の曲面のガウス曲率の定義とは定義がことなり, リーマン計量から定まる. ガウスの方程式からこれらは一致することがわかるが, 区別が必要なときは「内的な」という語をつける.

⁵⁾ 平坦: flat

補題 3.12. 2次元リーマン多様体 (S, ds^2) の座標近傍 $(U; u^1, u^2)$ 上でリーマン計量が $ds^2 = (du^1)^2 + (du^2)^2$ とかけていれば, U 上でガウス曲率は恒等的に 0 である.

証明. 仮定より, $e_j := \partial/\partial u^j$ ($j = 1, 2$) とおくと, $\{e_1, e_2\}$ は正規直交枠を与える. とくに, 補題 2.4 と (2.9) から

$$[e_1, e_2] = \nabla_{e_1} e_2 - \nabla_{e_2} e_1 = 0.$$

したがって, 接続形式 μ は

$$\begin{aligned}\mu(e_1) &= \langle \nabla_{e_1} e_2, e_1 \rangle = \langle \nabla_{e_2} e_1, e_1 \rangle = -\frac{1}{2} e_2 \langle e_1, e_1 \rangle = 0, \\ \mu(e_2) &= \langle \nabla_{e_2} e_2, e_1 \rangle = e_2 \langle e_2, e_1 \rangle - \langle e_2, \nabla_{e_2} e_1 \rangle = \langle e_2, \nabla_{e_1} e_2 \rangle = 0\end{aligned}$$

となり $d\mu$ は恒等的に零になるから $K = 0$. \square

定理 3.13 (定理 2.9 再録). 2次元リーマン多様体 (S, ds^2) のガウス曲率が恒等的に零ならば, 各点 $P \in S$ の近傍 U 上の座標系 (x, y) で $ds^2 = (dx)^2 + (dy)^2$ となるものが存在する.

証明. 点 P の単連結な近傍 U の P を原点 $(0, 0)$ とする座標系 (u, v) と, 正規直交枠 $\{e_1, e_2\}$ をとり, この正規直交枠に関する接続形式を μ とする. μ は U 上の 1 次微分形式だから,

$$\mu = \alpha du + \beta dv$$

とかける. ただし α, β は (u, v) の滑らかな関数である. すると

$$d\mu = (\beta_u - \alpha_v) du \wedge dv$$

なので, 仮定から

$$(3.7) \quad \beta_u - \alpha_v = 0$$

が成り立つ.

これらを用いて, 2×2 -行列に値をもつ未知関数 \mathcal{F} に関する微分方程式

$$(3.8) \quad \frac{\partial \mathcal{F}}{\partial u} = \mathcal{F}\Omega, \quad \frac{\partial \mathcal{F}}{\partial v} = \mathcal{F}\Lambda, \quad \mathcal{F}(0, 0) = \text{id}$$

$$\Omega := \begin{pmatrix} 0 & \alpha \\ -\alpha & 0 \end{pmatrix}, \quad \Lambda := \begin{pmatrix} 0 & \beta \\ -\beta & 0 \end{pmatrix}$$

を考える. 式 (3.7) から

$$\Omega_v - \Lambda_u - \Omega\Lambda + \Lambda\Omega = (\alpha_v - \beta_u) \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -1 & 0 \end{pmatrix} = 0$$

なので, 定理 2.1 の仮定 (2.1) を満たしている. 領域 U は単連結にとっていたから, 式 (3.8) をみたく $\mathcal{F}: U \rightarrow M_2(\mathbb{R})$ がただ一つ存在する. さらに Ω, Λ はともに交代行列に値をとり, 初期条件が $\text{id} \in \text{SO}(2)$ なので, \mathcal{F} は $\text{SO}(2)$ に値をとる. そこで, \mathcal{F} を列ベクトルに分解して

$$\mathcal{F} = (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2)$$

とすると, $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$ は (u, v) の滑らかなベクトル値関数で, $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2\}$ は \mathbb{R}^2 の正規直交基を与える. とくに

$$\begin{aligned}d\mathbf{a}_1 &= (\mathbf{a}_1)_u du + (\mathbf{a}_1)_v dv = -\alpha \mathbf{a}_2 du - \beta \mathbf{a}_2 dv \\ &= -\mu \mathbf{a}_2, \\ d\mathbf{a}_2 &= \mu \mathbf{a}_1\end{aligned}$$

が成り立つ. ここで, \mathbb{R}^2 に値をとる $U \subset S$ 上の 1 次微分形式

$$\omega := \mathbf{a}_1 \omega^1 + \mathbf{a}_2 \omega^2$$

を考える. ただし $\{\omega^1, \omega^2\}$ は正規直交枠 $\{e_1, e_2\}$ の双対基底である. 補題 3.5 から

$$\begin{aligned}d\omega &= d\mathbf{a}_1 \wedge \omega^1 + \mathbf{a}_1 d\omega^1 + d\mathbf{a}_2 \wedge \omega^2 + \mathbf{a}_2 d\omega^2 \\ &= -\mathbf{a}_2 \mu \wedge \omega^1 + \mathbf{a}_1 d\omega^1 + \mathbf{a}_1 \mu \wedge \omega^2 + \mathbf{a}_2 d\omega^2 = 0.\end{aligned}$$

したがって、ポアンカレの補題 (定理 1.16) から

$$df = \omega, \quad f(0, 0) = \mathbf{0}$$

を満たす $f: U \rightarrow \mathbb{R}^2$ が唯一存在する. この写像は

$$df(e_1) = \mathbf{a}_1, \quad df(e_2) = \mathbf{a}_2$$

を満たしているので, 各点 $Q \in U$ に対して

$$(df)_Q: T_Q S \longrightarrow T_{f(Q)} \mathbb{R}^2 = \mathbb{R}^2$$

は内積を保つ. そこで $f(u, v) = (x, y)$ とおくと, (x, y) は結論をみたく局所座標系を与えている. \square

定理 3.13 の別証明. ガウス曲率が恒等的に 0 であることから, $d\mu = 0$. したがって, 点 P の単連結な近傍で $\mu = d\theta$ となるような関数 θ が存在する (ポアンカレの補題, 定理 1.16). そこで (3.4) のようにして正規直交枠 $\{\tilde{e}_1, \tilde{e}_2\}$ をとると, この枠に関する接続形式 $\tilde{\mu}$ は恒等的に零である. そこで, $\{\tilde{e}_1, \tilde{e}_2\}$ の双対基底を $\{\tilde{\omega}^1, \tilde{\omega}^2\}$ とすると, 補題 3.5 から

$$d\tilde{\omega}^1 = d\tilde{\omega}^2 = 0$$

が成り立つ. したがって, ポアンカレの補題 (定理 1.16) から $dx = \tilde{\omega}^1, dy = \tilde{\omega}^2$ となるような関数 (x, y) がとれる. これが求める座標である (問題 III-4). \square

問 題 III

III-1 2次元リーマン多様体 (S, ds^2) の座標近傍 $(U; u^1, u^2)$ 上で, リーマン計量の係数を

$$E := g_{11}, \quad F := g_{12} = g_{21}, \quad G := g_{22}$$

と書くとき, $\{\partial/\partial u^1, \partial/\partial u^2\}$ にグラム・シュミットの直交化を施して得られる正規直交枠 $\{e_1, e_2\}$ を $\partial/\partial u^1, \partial/\partial u^2, E, F, G$ を用いて表しなさい.

III-2 補題 3.6 を示しなさい.

III-3 命題 3.9 を示しなさい.

III-4 定理 2.9 の「別証明」で得られた (x, y) が結論を満たすことを確かめなさい.

III-5 第 II 回の補足:「定理 2.1 の高次元化」に相当する定理のステートメントを書きなさい(証明する必要はない).